

第5回 Poem & Art Collection

◆会期 2016年1月9日(土) (午後1時から) ~ 19日(火)

期間中 午前10時~午後5時(最終日は午後3時迄)

◆会場 神戸文学館(休館日 水曜日)

◆内容

☆ポエム&アートコレクション(会員によるアート・オブジェ作品展示)

☆兵庫・詩の現在展(会員の詩集・詩誌展示)

☆特別イベント(2016年1月16日土曜日午後2時~)

講演「兵庫・神戸を生きた詩人を語る③」 詩と音楽の出会いコンサート

※たかとう匡子が中村隆について講演します。またコンサートでは
甲斐誠三・恵子が北原白秋や中島みゆきなどの作品を取り上げます。
ご参加お待ちしております。

特別イベントのお申し込みは神戸文学館へ

詳しくは別紙パンフレットをご覧ください。

兵庫県現代詩協会
会報

38号

2015年12月1日

発行…たかとう匡子

第4回文学紀行 —飛鳥路をゆく—

2016年3月6日(日)

行程 三宮 → 奈良県 今井町 → 昼食 → 飛鳥散策 →
柿の葉寿司ヤマト飛鳥店 → 三宮 (貸し切りバス)

集合 8時30分 三宮の中央区役所南側2号線沿い

参加費 7000円 (バス運賃が値上がりしました。)

予定参加人数 25名まで

申込み 葉書、fax、メールにて神田さよ宛にお願いします。

〒663-8006 西宮市段上町6-14-4 ☎ 0798-53-0686 / fax 0798-53-6991

E・メールnrk54251@nifty.com

申込み締切 2月25日(木)

集合場所など詳しくは同封のパンフレットをご覧ください。

詩のフェスタ 盛会のうちに終わる

十月四日 十三時より十六時
ラッセホール ハイビスカス

演題 「書くこと、待つこと。」

― 中原中也とチェホフをめくって

出演 李紗英・小栗秀夫・北岡武司・白石守

高木朝雄・ナイロンかむはむ・永井ますみ

中嶋康雄・望月逸子・特別参加 佐々木幹郎

(敬称略)



秋晴れの十月四日、「詩のフェスタ」が行われた。講師は佐々木幹郎氏。定刻の十三時に開始、時里二郎の司会で進められた。

たかとう匡子実行委員長の挨拶の後、第一部の佐々木氏の講演が行われた。演題は「書くこと、待つこと。」― 中也とチェホフ」。(講演の内容記録は次ページ) 詩を書くことの根本に寄り添った、心に滲みる講演であった。講演後、佐々木氏への質問の時間では、四人ほどの質問者が手を挙げた。東日本大震災直後の詩の言葉と、四年半過ぎた今日では詩の言葉は変化しているか、佐々木氏のネパールの活動について、中也の詩の分類について、などの質問に対しての、佐々木氏の丁寧なお話ぶりが印象深かった。

第二部は朗読会。チラシをご覧になって応募された方が五名。兵庫県現代詩協会の会員で希望された方四名、それに特別出演で、講師の佐々木氏が加わってくださり、合計十名が朗読した。

それぞれの方が、個性ある作品であり、朗読も聞きやすかった。佐々木氏の朗読で盛り上がり、第二部は大橋愛由等の閉会の挨拶で幕を閉じた。

その後、兵庫県現代詩協会主催の懇親会が、三宮金魚本店で行われた。佐々

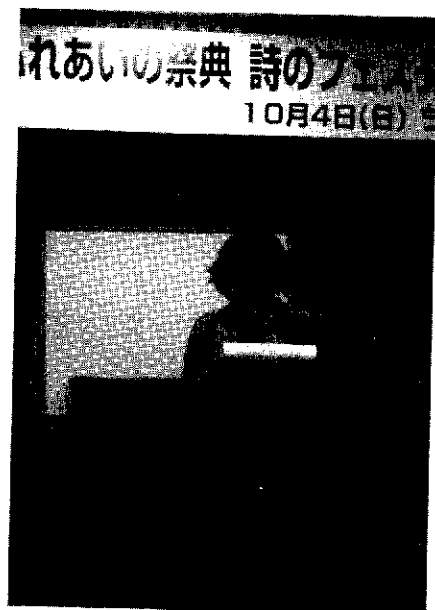


木氏も参加され、膝を突き合わせて楽しい会となった。また、山口県湯田温泉の中原中也記念館の館長中原豊氏も駆けつけて下さり、講演会、懇親会と参加して下さった。

当日アンケートを実施したが、概ね全て良かったという回答であった。講演についても、佐々木氏の熱意あるお話が伝わった、柔らかな語り口は心に滲み、中也の詩を改めて読もうと思った、など好評であった。「詩のフェスタ」は、兵庫県の催しを兵庫県現代詩協会が委託された形で行われる。「ふれあいの祭典」と称して県内各所で、様々な分野の文化団体がそれぞれの催しを行う。詩という分野で何の成果があるかは分からない。私たちは詩を書き続けることで、ある意味、文化や精神を担っているのだと思う。その書くための栄養を、近年行われている講演などによって得られている。これからの時代、ますます文化や思想が大切なものになると思う。またそうならなければならない。その意味で「詩のフェスタ」はその成果をもたらしたと言える。

参加者 68名(うち 協会会員45名・一般23名)
懇親会参加者 31名

(神田さよ)



詩を「書く」ことは「待つ」ことか ―佐々木幹郎氏の講演から―

詩にまつわる見事な話法がつづられた。

一〇月四日（日）、神戸市中央区のラッセホールにて、「二〇一五年ふれあいの祭典・詩のフェスタひょうご」が開催され、第一部には、詩人・佐々木幹郎氏が「書く」こと、「待つ」こと―中原中也とチェホフをめぐって―をテーマとする講演が行われた。

佐々木氏の語りは、「書く」（待つ）（中原中也）（チェホフ）という一見すれば別個のアイテムを、詩にかかわる人たちが集まる会場にふさわしく、詩にとつてなにか重要な中心に据えながら、この四つのアイテムを有機的に結びつけて話をつづったのである。

佐々木氏は、詩にとつて大切なことをふたつ挙げる。

そのひとつは、幼児体験。「木を「木」と呼び、かぜを「風」と書くことを教えられる前の状態の新鮮な言語感覚。つまりどの人間においても、はじめて言葉にふれた幼児のように言葉を自由にあやつることができた時代」を忘れずにいることの大切さ。

ふたつめは、詩をいつ書くか、ということ。つまり「いつ「書く」のか」は、「どれだけ「待つ」のか」であり、その待つ時間が「たとえ「一瞬」であっても、そこに「待つ」時間がある」と語った。こうした想いは、3・11東日本大震災のあとの詩情から発想されたものだった。「なにか事件が起こった直後に言葉を発するということはどういうことか、もつと時間をかけるべきではないか、あるいは書かなくてもよいのではないか」といった議論があつたなかで、「たとえすぐに書き出したとしても、その一瞬のうちには長い時間が含まれている」と考えるようになったのである。

この書くことと待つことに関する所見は、小林秀雄の評論「無常といふこと」からの引用「僕は、たゞあるうち足りた時間があつたことを思ひ出してゐるだけだ」との箇所と響きあつている。書くまでの待つ時間はたとえ短くとも「うち足りた時間があつたこと」の思ひ出が含まれていないか。この小林の引用はさらに中原中也の詩「含羞」の中の「あゝー 過ぎし日の 仄燃えあざやぐをりをりを」と響きあつていると指摘する。

そしてその中也である。佐々木氏は語らざるほどに親しんでいる「曇天」の作品に言及する。「ある朝僕は 空の下に、／黒い 旗が はためくのを 見た。」と始まる詩である。この詩には「奥処」という言葉が登場する。フランス詩を訳出する際に「宇宙全体の奥底」という意味で中也が創り出した言葉である。

「曇天」にはこの「奥処」が意味するような天の上にある場所や、「かの時この時」に表わされている幼少時から今と往還できる時間帯、さらには解釈も分析も出来ない意識の状態などが、発見され呼び出されることによって、中也は詩を書くこと、つまり「待つ」ことを上手に思い出し内在化していると分析する。

では中也とチェホフはどこでどう結びついているのだろうか。それは二年前に発見された中也の未発見の書簡と関連している。その書簡が見つかったのは、中也と親交があつた安原善弘が住んでいた家からである。使用された原稿用紙、筆記具、独特の字のクセといったいくつかの要素から、中也が昭和九（一九三四年）に書いたものと推定された。その推定にいたるまでの佐々木氏の解説はスリリングでかつ謎解きをしているように聴く者を魅了した。

書簡ではチェホフの小説「黒法師」を読むよう中也是安原に薦めている。中也是自分を「天才」と思っ

ていたこともあり、主人公である若者が、蜷気楼でしかない「黒法師」から言われた「あんたは正しく神に選ばれた人と称される少数の中の一人ぢや」との台詞にシンパシーを感じていたのだろう。それはひいては、「この世に受け入れられない創作者の孤独と、それに耐えられない者」としての自覚であつた。この書簡からは中也が記憶違いも含めてチェホフを読み込んだ時間がうかがえ、その時間がすなわち「書く」までの「待つ」ことにつながってゆくのである。

（大橋愛由等）



第七回読書会

テーマ「佐々木幹郎の詩精神について」
文字ではなく「声」を探して――

七月十八日、《詩のフェスタ》での佐々木幹郎氏の公演に先立っての読書会に参加した。チューターは季村敏夫氏。佐々木氏とは十九歳からの付き合いがあり、詩人としての客観視は困難としながらも、その詩精神について佐々木幹郎「東北を聴く――民謡の原点を訪ねて」(2014年、岩波新書)をテキストに話された。

津軽三味線二代目高橋竹山とともに東日本大震災直後に被災地の村々を行脚した佐々木氏は次のように記している。「東日本大震災が起こったとき、わたしが一番欲したのは、東北の声を聴くことだった。濃密な東北弁の声を聴きたかった(中略)求めているのは文字ではなかった、あくまで、本能的に声を探していた。」

季村氏は「声は、(聴こえる)ものではなく、聴こえないものに潜む。声(沈黙)を聴きとる、こういう換えてよいとおもう」と述べられた。テキストで佐々木氏はノヴァーリスの詩「すべての見えるものは見えぬものに/聞こえるものは聞こえないものに/感じられるものは感じられないものに/付着している(以下略)」を引用しているが、これらの言葉がこの旅を通じて一層身に染み込んだのではないかと。

また本書で佐々木氏は、「ノヴァーリスをもじって言えば、想定できないもののなかに《付着している》ものをこそ、わたしたちは見つめねばならないし、そこでの想像力を鍛えねばならないのである」と述べている。季村氏はこうした声を「沈黙」と捉え、聴こえない東北の声は沈黙のうちに潜み、この沈黙の声をどう考えるのか：文字のない時間の方が文字のある時間よりも圧倒的に濃密であったことを、例えば、本居宣長を巡っての江藤淳と小林秀雄の対談から、あるいは、武満徹の「音、沈黙と測りあえるほどに」(1971年、新潮社)から、

また太田省吾の沈黙劇「小町風伝」「水の駅」を取り上げながら、「人間はしゃべらないことが常態であり、言葉をもたないことに本質的な在り方がある。荒野の中にゴロンと横たわる石や黙って死んでいく牛：これらは人間の本質を裸像としてあらわす」と語られた。

さらに、詩語の在り方として、「世界(他者との交通の場)」にさらされながら、訪れる者との対話「こそが詩のことばではないかと。佐々木氏のリーディングの現場に際して、次のような書き換えの指摘が印象的だった。佐々木幹郎「奇妙な果実」(詩集「砂から」2002年、書肆山田)の二節――「言葉をさがして黙っている誰かに伝えるためではなく誰にも伝えたくないから黙っている」↓誰かに伝えるために黙っている(リーディングの現場)へ。

この改作について、季村氏は「この書き換えに彼の世界に向かう姿勢が出ていると思う」と述べられた。ここでの「世界」はいうまでもなく先にあげた「他者との交通の場」であろう。

(福田知子)

エッセイ・梢に旅立つ

尾崎 美紀

長田弘さんが亡くなったことを知ったのは、一週間後の新聞だった。新しい人でもないのに狼狽えるというのはこういうことかと思うほど、朝から何も手につかなかった。新聞を何度も読み直し勘違いであること祈った。

長田さんとお会いしたのは、もう十年以上も前のこと、姫路の文学館で講演された折に、司会を務めさせていただいたのだった。その時のことは、今でもはっきりと覚えていて。演題は著書のタイトル『世界は一冊の本』。お話の中で、長田さんは繰り返すことばについて語られた。

「ことばではなく情報が手渡されることによって、世代が違おうと言葉が伝わらなくなってきた。手渡される共通のことばがなくなってきたからだ。生活の変化はそのままことばの変化になり、他人の生き方をたすきのように手渡す老人が消え、比喩が貧しくなってしまう」

長田さんの詩は、いつも何か懐かしさと心の安らぎを覚える。「詩を読まぬ人々のために詩を書くことが詩人の仕事である」と言い切る長田さん。立ち止まり、振り返り、そして目を凝らして耳を澄ませる。すると、ひとつひとつの呼吸の中から一編の詩が生まれる。そこには、人を見る厳しさと優しさが同居していた。

とりわけ木が好きなのは、木についての詩が多い長田さんの作品に心惹かれた。山深い獣道で、朽ちた大木の側、まさに木と同化した長田さんの姿が見える。茂る木々にことばという葉がざわざわと騒いで、ああ、いま詩が生まれる、と声を上げたくなる。

講演会の帰り駅までの途中で、長田さんと暫しお茶を飲むことになった。コーヒー好きだと知っていた私は、駅前の小さな喫茶店「夕夕」にお誘いした。ここは、かつて文士たちが文学について論をかわしたことで有名な店である。長田さんは、雰囲気がいねとおっしゃって、おいしそうにコーヒーをすすっておられた。

その貴重な時間の中で、舞い上がってしまった私は、何を話したのかさっぱり思い出せない。詩の話をしたと、コーヒーの話、丸顔で穏やかな口調が時間をゆつくりと進ませてくれた。真ん中からそっと開いたような長田さんのサインは、今は本棚の中でひっそりと眠っている。

五月三日、その日は植物園へハンカチの花を見に行っていた。想像以上の高みに、真っ白な花が名前の通りハンカチのように揺れていた。濃い緑の香りの中で、私は長田さんの詩をふと思い出していった。

「私たちは、すっかり忘れていたのだ。むかし、私たちは木だったのだ」

見上げると、まるでさよならという風に、梢でハンカチが揺れていた。

追悼

伊勢田史郎のこと

直原 弘道

伊勢田史郎は一九二九年生まれで、私より年上であったが、最近まで何度も私の病床に見舞ってくれたし、突然亡くなるとは思ってもみなかった。

私は、一九五七年に伊勢田史郎が属する詩誌「輪」に参加、「輪」が一〇〇号で終刊したのちも、伊勢田が発刊した文芸誌「階段」に協力し続けた。六十年にわたる詩友である。

私の心に残っている彼の初期詩篇を探したのでが整理が悪くて見つからない。

処女詩集『エリヤ抄』は一九五二年で、第二詩集『幻影とともに』が一九五八年、この第二詩集の頃から彼の詩法が確立されてきたのだと私は思う。

どんなに暑い午後であったか

羊帳たる登路のなかば　の岩場で　男は

ひとり

檸檬を齧っていた

ひっそり　仰向いて　その果汁を啜っていた

陽炎　が

ゆらゆら　と

立ちのぼってくる

(以後略)

これは彼の詩語の典型とは言えないかもしれない。しかし、モダンイズムの影響を透過し、それから抜け出した彼の詩法を、想像してもらいたい。かれの詩法には、一貫して現実への認識とそれへの批評が隠されていたと私は思っている。

私も一度、伊勢田と、芦屋のロックガーデンから六甲山にのぼったことがあるが、伊勢田史郎は山登りの好きな男だった。

彼は岩場に挑むということだけでなく、山の荒涼たる風景のなかから、そこに咲いている小さな花や小さな生き物を愛する目配りを大切にしていたと思う。

あえぎながら

半ば夢から醒めるおもい　に

ひたされながら

霧　が

まくれあがつてゆく

峠を越える　と　眼下に

あわい朱色の海がひろがっていた

(以下略)

詩集「山の遠近」(一九七九年)、「熊野詩集」(一九九一年)など、山に関する詩作品も多い。

そのほか、伊勢田史郎には小説や長文の論述があり、何冊かの単行本もだしている。一九九二年の「船場物語」(一九八三年の「丁稚あがり道一筋―加藤徳三伝」、さらに何冊かの共著「兵庫史を歩く」など、多彩な分野への興味と文才を発揮している。

さらに伊勢田は広範な社会的活動によってその存在を際立たせた。

その第一は児童詩の育成と何冊かの児童詩集の出版。

その第二は、カルチャー教室による長期の指導と作品集の継続発行。

第三に震災時における文化活動での復興を目指す活動での指導力の発揮。

第四に神戸芸術文化会議で初代議長、兵庫県現代詩協会会長に就任するなど神戸における文化活動発展への貢献。

教え上げればきりが無い。要するに稀に見る神戸詩壇の逸材であった。

震災の年の夏、私は伊勢田をさそって、兵教組の中国訪問旅行に同伴した。重慶からの数日にわたる河下りの船の旅、あの旅で、震災による心身の痛手もいくらかは慰められたと思う。伊勢田史郎と私との濃密な友情の証しであった。

詩作品

夢の中

橋本 千秋

目が覚めたのかと思ひ部屋を覗くと、寝返りを打ち何か呟いている。夢を見ているのか、喉がヒクヒク動いている。名前を呼ぶと目を覚まし、膝小僧を撫でる。靴が脱げて転んで、大きな犬がいて、じゃんけんで勝って、ポケモンのカードを取ったと、夢の中のお話をしてくれる。

夕方になって公園まで迎えに行く。お友だちと輪になって遊んでいる。逸れたボールが転がってくる。それを追いかけて犬が走ってくる。カードを置いて逃げる子どもたち。ぶつかって転んだ。膝小僧が擦りむけている。片方の靴が脱げたまま、泣きながら走ってくる。

この世界は私が見ている夢。夢の中に私がいる。

第七回読書会

テーマ「佐々木幹郎の詩精神について」
文字ではなく「声」を探して――

七月十八日、《詩のフェスタ》での佐々木幹郎氏の公演に先立っての読書会に参加した。チューターは季村敏夫氏。佐々木氏とは十九歳からの付き合いがあり、詩人としての客観視は困難としながらも、その詩精神について佐々木幹郎「東北を聴く――民謡の原点を訪ねて」(2014年、岩波新書)をテキストに話された。

津軽三味線二代目高橋竹山とともに東日本大震災直後に被災地の村々を歩いた佐々木氏は次のように記している。「東日本大震災が起こったとき、わたしが一番欲したのは、東北の声を聴くことだった。濃密な東北弁の声を聴きたかった(中略)求めているのは文字ではなかった、あくまで、本能的に声を探していた」。

季村氏は「声は、(聴こえる)ものではなく、聴こえないものに潜む。声(沈黙)を聴きとる、こういう換えてよいとおもう」と述べられた。テキストで佐々木氏はノヴァーリスの詩「すべての見えるものは見えないものに/聞こえるものは聞こえないものに/感じられるものは感じられないものに/付着している(以下略)」を引用しているが、これらの言葉がこの旅を通じて一層身に染み込んだのではないかと。

また本書で佐々木氏は、「ノヴァーリスをもじって言えば、想定できないもののなかに《付着している》ものをこそ、わたしたちは見つめねばならないし、そこでの想像力を鍛えねばならないのである」と述べている。季村氏はこうした声を「沈黙」と捉え、聴こえない東北の声は沈黙のうちに潜み、この沈黙の声をどう考えるのか：文字のない時間の方が文字のある時間よりも圧倒的に濃密であったことを、例えば、本居宣長を巡っての江藤淳と小林秀雄の対談から、あるいは、武満徹の『音、沈黙と測りあえるほどに』(1971年、新潮社)から、

また太田省吾の沈黙劇「小町風伝」「水の駅」を取り上げながら、「人間はしゃべらないことが常態であり、言葉をもたないことに本質的な在り方がある。荒野の中にゴロンと横たわる石や黙って死んでいく牛：これらは人間の本质を裸像としてあらわす」と語られた。

さらに、詩語の在り方として、「世界(他者との交通の場)にさらされながら、訪れる者との対話」こそが詩のことばではないかと。佐々木氏のリーディングの現場に際して、次のような書き換えの指摘が印象的だった。佐々木幹郎「奇妙な果実(詩集『砂から』2002年、書肆山田)の一節――「言葉がさがして黙っている誰かに伝えるためではなく誰にも伝えたくないから黙っている」↓誰かに伝えるために黙っている(リーディングの現場)へ。

この改作について、季村氏は「この書き換えに彼の世界に向かう姿勢が出ていると思う」と述べられた。ここでの「世界」はいうまでもなく先にあげた「他者との交通の場」であろう。

(福田知子)

エッセイ・梢に旅立つ

尾崎 美紀

長田弘さんが亡くなったことを知ったのは、一週間後の新聞だった。近しい人でもないのに狼狽えるというのはこういうことかと思うほど、朝から何も手につかなかった。新聞を何度も読み直し勘違いであること祈った。

長田さんとお会いしたのは、もう十年以上も前のこと、姫路の文学館で講演された折に、司会を務めさせていただいたのだった。その時のことは、今でもはっきりと覚えている。演題は著書のタイトル『世界は一冊の本』。お話の中で、長田さんは繰り返しことばについて語られた。

「ことばではなく情報が手渡されることによって、世代が違うと言葉が伝わらなくなってきた。手渡される共通のことばがなくなってきたからだ。生活の変化はそのままことばの変化になり、他人の生き方をたすきのように手渡す老人が消え、比喩が貧しくなってしまった」

長田さんの詩は、いつも何か懐かしさと心の安らぎを覚える。「詩を読まぬ人々のために詩を書くことが詩人の仕事である」と言い切る長田さん。立ち止まり、振り返り、そして目を凝らして耳を澄ませる。すると、ひとつひとつの呼吸の中から一編の詩が生まれる。そこには、人を見る厳しさと優しさが同居していた。

とりわけ木が好きなのは、木についての詩が多い長田さんの作品に心惹かれた。山深い獣道で、朽ちた大木の側、まさに木と同化した長田さんの姿が見える。茂る木々にことばという葉がざわざわと騒いで、ああ、いま詩が生まれる、と声を上げたくなる。

講演会の帰り駅までの途中で、長田さんと暫しお茶を飲むことになった。コーヒー好きだと知っていた私は、駅前の小さな喫茶店『タタ』にお誘いした。ここは、かつて文士たちが文学について論をかわしたことで有名な店である。長田さんは、雰囲気がいいねとおっしゃって、おいしそうにコーヒーをすすっておられた。その貴重な時間の中で、舞い上がってしまった私は、何を話したのかさっぱり思い出せない。詩の話をしつと、コーヒーの話、丸顔で穏やかな口調が時間をゆつくりと進ませてくれた。真ん中からそつと開いたような長田さんのサインは、今は本棚の中でひっそりと眠っている。

五月三日、その日は私は植物園へハンカチの花を見に行っていた。想像以上の高みに、真っ白な花が名前の通りハンカチのように揺れていた。濃い緑の香りの中で、私は長田さんの詩をふと思いついて出していた。「私たちは、すっかり忘れていたのだ。むかし、私たちは木だったのだ」

見上げると、まるできよならという風に、梢でハンカチが揺れていた。

◇常任理事会の報告

◇五月十七日第一回常任理事会、私学会館にて。常任理事八名出席。常任理事の役割分担決定。第七回読書会（日程七月十八日午後一時）。取り上げる詩人―佐々木幹朗。報告者―季村敏夫。ポエム&アートコレクション（日程一月九日〜十九日。内容についてはこれから検討）文学紀行（三月に実施。十二月会報に案内を掲載）常任理事会の議事録を各理事にメールなどで送付することに決定。詩のフェスタひょうご（十月四日午後一時〜ラッセホール。講演者―佐々木幹朗氏）

◇七月二十日第二回常任理事会、私学会館にて。常任理事八名出席。ホームページを新しくアップ。ポエム&アートコレクション（第一部―「兵庫の詩人・中村隆」チューター―たかとう匡子。第二部「詩に音楽を乗せて」ギター演奏と朗読）文学紀行（三月六日に決定。参加費七千円。旅行先―飛鳥と司馬遼太郎館など検討）詩のフェスタひょうご（佐々木幹朗氏講演「『書く』こと、『待つ』こと。中原中也とチェホフをめぐって」その他、読書会の反省、入退会者の確認など）

◇九月二十日第三回常任理事会、私学会館にて。常任理事九名出席。会計中間報告（野口幸雄）二〇一七年度アンソロジー（協会二十周年記念として「二十年の歩み」をつけ一九九七年以降の会員詩集及び詩誌を掲載する。担当―大橋愛由等）ポエム&アートコレクション（講演「中村隆 モダンリズムから生活に密着したリアリズムへ」講師―たかとう匡子。「詩と音楽の出会いコンサート」ギター―甲斐誠三・歌―甲斐恵子・朗読―丸田礼子）第八回読書会（十一月二十三日午後一時〜私学会館。取り上げる詩人―三好達治。報告者―北岡武司）文学紀行（三月六日。飛鳥旅行に決定）詩のフェスタひょうご開催についての最終決定事項など。

（尾崎美紀）

新入会員紹介

*富 哲世

「月刊メランジュ」に参加。

ブログ「詩の手前」並びに「富哲世」にて現代詩をめぐる活動を行っている。

〒651-0101 神戸市北区泉台7の9の5

E-mail tonionis488@ezweb.ne.jp

◇兵庫県現代詩協会今後の予定

読書会

二〇一六年二月二十日（土）草野心平

チューター 高谷和幸 私学会館

同封のハガキで申し込んでください。

第二十回 総会

二〇一六年五月八日（日）ラッセホール

詳しくは、ご通知します。

◇会員の動静

たかとう匡子

*9月19日ドーンセンター

関西詩人協会のイベントにて講演「言葉の経験」

*第39回井植文化賞受賞

神田さよ

神田さよ詩集『傾いた家』出版記念会

8月30日 ニューミュンヘン

伊勢田史郎お別れの会

10月12日生田神社会館

◇事務局より

会員の詩誌、詩集、著作物などの出版物は事務局

神田さよまでお送り下さい。

〒663・8006

西宮市段上町6の14の4

◇会計より

協力金

鈴木 漢・坂本久刀・江口 節・田中敏弘

伊勢田史郎・直原弘道・福井久子・鳥巢郁美

安水稔和・三宅 武 他一名

ありがとうございます。

今年度年会費未納の方は、速やかにお納めください。

年会費 四〇〇〇円

前回お送りした振込用紙で振り込んでください。

郵便振替口座 0092019111243

兵庫県現代詩協会

◇会報担当より

会員の方のエッセイ、詩をご寄稿ください。

会報担当 大西隆志（39号より）

〒670・0022 姫路市西今宿3-1-9-702

メールアドレス furadou@extra.ocn.jp

◇入退会

退会、住所変更はお知らせください。

また、協会へ入会希望の方をご紹介下さい。

連絡先 入退会担当 尾崎美紀

事務局 神田さよ



◇会員の発行書

「声をあげよう 言葉を出そう」 安水稔和
 神戸新聞総合出版センター
 『安水稔和詩集』 沖積舎
 神田さよ詩集 『傾いた家』 思潮社
 東北ればーと 神田さよ 私家版
 橋本千秋詩集『夢の箱』編集工房ノア

◇会員の詩誌

アリゼ 166号 167号 168号 以倉紘平
 Master 45号 香山雅代
 別嬪 96号 97号 高橋夏男
 おたくさII 17号 18号 19号 鈴木漠
 風箋 8号 かたたとき
 まほろば 35号 たかはらおさむ
 叢生 198号 199号 200号 (終刊号) 江口節
 姫路文学 129号 石山淳
 Contralto 34号 坂東里美
 多島海 27号 江口節
 Merange 101・102号 大橋愛由等
 文芸日女道 564号 市川宏三
 a wind egg 18号 川田あひる
 現代詩神戸 249号 250号 永井ますみ
 花筏 28号 住吉千代美
 プラタナス 神戸詩人会議 59号 玉川脩香
 Poetry Reading 31・31-1 宝塚 寺田操
 風の音 9号 たかとう匡子
 木想 3号 高橋富美子
 reflection 川田あひる
 a wind 21号 藤村英夫の遺言 川田あひる
 汽水湖 創刊号 福永祥子

◇他団体の出版

福島県現代詩集2015 (福島県詩人会)
 明石大門 (明石ペンクラブ)
 栃木県現代詩年鑑 2015 (我妻洋)
 いわたの詩 (岩手詩人クラブ)
 2015・年刊詩集 (徳島現代詩協会)

◇他団体の会報

静岡県詩人124号 (中久輝夫)・明石大門だより13
 5・136 (野瀬昭二)・岡山県詩人協会だより15号
 (壺阪輝代)・群馬詩人クラブ292号 (平野秀哉)・
 福井県詩人懇話会会報89号 (渡辺本爾)・詩界通信71号
 (日本詩人クラブ)・山形県詩人会会報28号 (高橋英
 司)・福岡県詩人会162号 (田島安江)・すずかけ7
 月号・9月号 (兵庫県芸術文化協会文化振興部)・宮城
 県詩人会21号 (前原正治)・岐阜県詩人会5号 (頼圭二
 郎)・ふふ 詩人集団静岡32号 (篠崎純一)・岩手県詩
 人クラブ・日本現代詩人会139号 (北畑光男)・秋田
 県現代詩人協会会報52号 (横山仁)・宮城県「詩の会」
 会報36号 (中島めい子)・大分県詩人連盟会報「いち」
 通信」12号 (河野俊一)・大分県詩人協会会報143号
 (工藤和信)・すずかけ8月号 (兵庫県芸術文化協会文
 化振興課)・北海道詩人139号 (坂本孝一)・中四国
 詩人会ニユースレター (岡隆夫)・静岡県詩人125
 (静岡県詩人会 篠崎純一)・香川県詩人協会 会報52
 号 (竹生淳)・埼玉詩人会会報 (小林稔・豊島雅子)・
 個人誌 大西美千代個人誌11・12号・中日詩人会会報
 184号 (岩井昭)・高知詩の会通信14号 (林嗣夫)

◇入会

富 哲世

◇退会

今井裕子
 市川宏三
 石山 淳
 中島妙子
 北野豪一

伊勢田史郎 (逝去)

55年、詩誌「輪」を創刊。阪神大震災で自宅が
 全壊しながら、被災地からの文化復興をめざす
 「アート・エイド・神戸」の実行委員長を務め
 た。後進の育成に熱心で、兵庫県現代詩協会の会
 長も務めた。大阪・中之島の市中央公会堂を造つ
 た株仲間人、岩本栄之助の生涯を描いた「またで
 散りゆく」を朝日新聞に連載した。詩集に『低山
 あるき』『熊野詩集』など。7月20日、肝臓がん
 で死去。10月12日、生田神社社会館にて「伊勢田史
 郎さんお別れの会」が開かれ、120名あまりの
 ゆかりの方がたが集った。本協会からもたかとう
 会長はじめ会員達が出席した。

★兵庫県現代詩協会事務局／神田さよ
 〒663-8006 西宮市段上町6の14の4
 電話 0798(53)0686
 ★会計／野口幸雄
 〒567-0846
 神戸市灘区岩屋北町4の4の5の902
 ★印刷所／社会福祉法人 新生会 新生会作業所
 〒662-0913 西宮市染殿町2の11